

旅立ち(ディパーチャーズ)にきく

ご讃題 (Ref『高僧和讃 曇鸞讃三五・三六』註釈版聖典 P584)

往相おうそうの回向えこうととくことは 弥陀みだの方便ぼうべんときいたり  
悲願ひがんの信行しんぎょうえしむれば 生死しやうじすなはち涅槃ねはんなり  
還相げんそうの回向えこうととくことは 利他りた教化きやうけの 果かをえしめ  
すなはち諸有しよいうに回入えにゅうして 普賢ふげんの徳とくを修しゆするなり

一、お盆の季節

探究社のお盆の冊子「よろこび」が送られてきました。

早速、掲載されているご法話を読ませて戴きました。

その一つのお話は「おくりびと」から始まっていました。

「おくりびと」は、数年前刊行された富山の青木新門さんの「納棺夫日記」を元にした映画であり、先頃、米アカデミー賞の外国語映画部門でノミネートされました。これは遺体に死化粧を施す納棺師の物語です。

ところが、「おくりびと」という作品のタイトルは、海外では「ディパーチャーズ(Departures)」に変わっていました。「納棺師のうかんし」ではなく、「送られる方たびだち」の「旅立ち」に焦点が当てられたことがわかります。

なるほど、お葬式は、旅立つ人の旅立って行く先の世界に関心が払われるのがむしろ自然です。

七月、八月はお盆の季節です。

それでは、肉親たちは一体どこへ旅立つのでしょうか。

まさか、キリスト教徒でもありませんから天国ではありますまい。

そこで、この機会にご一緒にその意味を考えてみたいと思うのです。

二、真実のご恩の世界に入る

お同行が亡くなるということ、私(住職)は枕経をお勤めに参ります。

亡くなられたお同行がまだ帰敬式ききやうしき(お剃刀おかみそり)をお受けになっていらっしゃるやらないときはお剃刀の儀式を行います。

そのとき称える偈文が

「流転るてん三界中さんがいちゆう 恩愛不能断おんないふのうだん 棄恩入無畏きおんにゆうむい 真実報恩者しんじつほうおんしや」であり

「南無帰依仏なむきえぶつ、南無帰依法なむきえぼう、南無帰依僧なむきえそう」という三帰依文であります。

これは、「この迷いの世界にあって、肉親との恩愛のきずなは断つことは容易ではありません。

けれども、迷いの世界の人情に縛られた恩を捨てて、如来様から給わったお悟りの世界に入ることこそ、如来様によって開かれた真実に目覚めてそのご恩に報ずるものとなるのです」という意味であり

「それには、私はおさとの世界に導いて下さる釈尊きえに帰依し、み教えに帰依し、釈尊のみ教えを頂戴して歩み続ける人々の和やかな集いに帰依します」とお誓い申すのであります。

この御文のお導きによって、この世を後にしたお同行は、阿弥陀如来の御本願とお釈迦如来のお導きによって、浄土に生き生まれ、往生するや否や、阿弥陀如来の本願力によって仏となるのであります。

こうして、送られる方が旅立つ先は、阿弥陀如来のご本願叶って仕上っていて下さる浄土であることがわかります。

親鸞聖人は、ご讃題の第一首で次のようにお歌いであります。

往相の回向ととくことは 弥陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば 生死すなはち涅槃なり

浄土に生き生まれる手立てを阿弥陀如来の本願力回向として仕上げ

ていて下さると説くことは、阿弥陀如来の優れたお手立てが働いてお救いに与るその時がやってきたということでもあります。

即ち、苦悩の有情を漏らさず救い取りたいとの大悲の信と行を頂戴するならば、迷いの存在がそのままお悟りに転ずるのであります。

娑婆で造りと作った三毒の煩惱の主の私は、地獄、餓鬼、畜生の三悪道を逃れる術はないのでありますが、如来の大悲の御手立てに遇うたからには、悪道への道がふさがれ、よき国への門に入らしめられるのであります。重誓偈に「閉塞諸悪道 通達善趣門」と謳われた通りであります。

本願力回向の南無阿弥陀を称えれば聞こえて下さる勅命に聞き入ること一つでお救いに与る信心一つによって浄土往生が叶うのであります(Ref 一多証文「きくといふは信心をあらはす御のりなり」註釈版 p678)。

### 三、還相回向に遇わせて戴く

ご讃題の第二首は、高僧和讃は曇鸞大師のご和讃であり、そのお心を明らかにして下さる御文であります

**還相の回向ととくことは 利他教化の果をえしめ**

**すなはち諸有に回入して 普賢の徳を修するなり**

とお説き下さっています。

浄土から還り来って、如来様のお仕事の一端を担うのも如来様より回向される還相回向の本願力によるのであります。

浄土に往生して仏となることは、娑婆世界にうごめく苦悩の群生を救い取るという利他教化の御力を頂戴したことに他ありません。

そこで、穢土に還り来たって、諸々の衆生の胸のうちに飛び込み、苦悩の衆生を一人また一人救い取る如来様の尊いお仕事に従事なさるといふのであります。

リビングライブズー「旅立ち (Departures) にきく」

浄土往生すれば、仏のお悟りを頂戴して安住することもできるのですが、娑婆世界に残る苦悩の有縁を捨て置くことができず、自らは、仏の悟りの身から、今一度菩薩の位に階位を落して衆生済度の尊いお仕事に従事下さるといふのであります。

なる程、子供等が娑婆で苦しんでいるというのに、親一人浄土の蓮の華の上で昼寝して安住できるはずもないことであります。

これを、ご讃題では「普賢の徳を修する」とお示し下さっています。

お盆の時節は、古来、通仏教では、ご先祖が懐かしい我が家へ還り来たってしばし今生の者とのひと時を過ごしてまた浄土にお帰りになると言われております。

これを浄土真宗の立場で味わわせて戴くとするなら、浄土往生し既に仏のお悟りを開かれた故人は、苦悩の真っ只中にある私を捨て置けず、如来の本願力に乗託してお浄土から娑婆世界に還り来って、今生の私に、「如来本願招喚の勅命にめざめよ」と尊い普賢菩薩の姿となって働いて下さるのだと頂戴することができるのではないのでしょうか。

お盆の俗信は、既にお念仏のお里に還られた故人の還相回向のお姿として味わうことができることであります。合掌(玄宥記)。

(後書き)通仏教のお盆の習俗を浄土真宗の還相回向のお味わいで頂戴してみました。尚、本一文作成に際しては、探究社「よろこび」2009年 No.107 菊城淳真師の「普賢の徳に遵う」を参考にさせて頂きました。合掌

|  |              |
|--|--------------|
| 正覚寺仏教壮年会例会                               | 毎月第一日曜午後八時より |
| 正覚寺仏教婦人会例会                               | 毎月十六日午後七時より  |
| 著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)      |              |
| 〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 0一六六 |              |
| ✉・🌐・mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥     |              |

平成二十一年七月六日初版発行、二十一年七月六日 改訂版 2